国文学研究資料館紀要　第九号（一九八三年三月）

版本・ぢんてき問答――翻刻と解題――

渡辺守邦

要旨　寛永九年刊整版の翻刻。『ぢんてき問答』は、群書類従に収められ、広く知られている。それは写本であるが、これは版本。写本と版本とでは、むしろ別作品とみなすべきほどに、内容が相違している。版本は、江戸時代を通じて、長く刊行され、読まれたものであったにもかかわらず、未翻刻のまま、ここに至った。あまたの諸版のうち、流布の源泉ともなった、寛永九年刊本を紹介し、併せて、諸版の解題を試みる。

はじめに

『ぢんてき問答』に二種類がある。こう言ってしまうのは、実はいささか暴論なのであるが、その方がむしろ説明が簡単になるもののようである。

その一は、もう一種が版本として広まったのに対し、今ここでは写本系と呼ぶことにしたい。すでに続群書類従に収められて翻刻が備わる。続類従本には巻末に正中二年成立とあり、早く大永四年の写本が伝存する（『弘文荘待賈古書目』28号、昭31・12）。東海道今善光寺門前の茶屋に憩う沙門が、俗体の男の質問に答えるかたちで、仏教的知識と教義とを鼓吹するものであり、『鹿島問答（破邪顕正義）』『旅宿問答』などとともに、教義問答の書として一群を形成する。俗体の男は、その場で髪をおろし、善摘（滴・敵）房と名乗る。沙門の名が妙塵房であって、この二人の名を取って「塵摘問答」の書名となっている。

写本系に対し、もう一種は版本である。これは古活字版として版を重ね、整版となってからも読者を絶やすことなく、幕末まで及んでいる。門前の茶店で出会った二人の間に問答が始まって、その第一問に「たうそう」（渡唐僧の意。古活字版以来「と」の一字を脱する）の尊ばれる由縁がとりあげられ、以下しばらくは写本系のとりあげるところに沿って論が進められるが、問答が重なるに従って、表現に相違が表われ、題材に出入りが激しくなる。写本系の話柄のうち、版本に採られるのは、鳥居の由来、歌連歌の初め等、由来や始原を説く部分に限られ、それらも文言を一致させる場合もなくはないものの、多くは説明に簡繁の相違をみせ、あるいは解釈を異にする。両者の相違を端的に表わしているのは、対話者の名前であろう。版本の二人は「くうしんばう」と「けんしんばう」。これでは「ぢん」「て

き」問答にならない。

版本の編者は、写本系の内容のうち、事物の起原あるいは由来を語る部分に関心を寄せ、これをテーマにすえて、類例を加えた。その結果として成ったものは『何物語』（寛文七年刊）『由来物語』（寛文九年刊）等に類し、さらには『人倫重宝記』（元禄九年刊）へと連なる事物起原の集成であり、その先駆をなす。採り上げられた事物やその説明が、写本以来の影響を曳いて、仏教的世界から完全に離れられていないのは、それら仮名草子に比べて、早い時期の所産であるところからして、やむをえないことかもしれない。

ただし、文章が難解な用辞を避け、センテンスを短く切って続ける、わかりやすいものであることに加え、「登り梯」の起原を、日輪の中に住む九羽の烏退治の一話に仕立て、五節句のいわれを、天竺の悪王「大とんわう」の所業に関連づけて説明するなど、説話仕立てへの志向が存在し、この点も読者の興味を引くに力あったものであろう。それらの説話に登場するのは「大ばんごわう（大盤古王）」であり、あるいは「ぜんじやうたいし（善生太子）」であって、彼らは、経典の講釈や、仏教系神道書のたぐいにおいて、なじみの深い人物。版本に盛り込まれた説話あるいは知識は、その辺に出所があるのかもしれない。

すでに活字化されている写本系の驥尾に付いて、ここに版本の翻刻を提供するに当り、所収各話の原拠あるいは後代への影響についての検討が行われ、本書の位置づけが明らかにされることを期待する次第である。

底本について

底本の書誌を述べるに先立って、翻刻の底本として、寛永九年刊整版本を選んだことについて一言しておきたい。

すでに触れたように、この版以前に、数種の古活字版が刊行されている。また、大本の寛永ごろ無刊記整版も、その版面より受ける印象からして寛永九年版に先行するかと思われる。それら早い時期の刊本をさし置き、寛永九年版をあえて採った理由は、この版が中本の体裁を持つこと、にある。以後の諸版は、幕末の二、三を除いてこの体裁に従い、『ぢんてき問答』は中本形式、という概念が定着する。つまり、整版になって以後の流布の源泉の位置に、この版は立っている。

これは、ひとり体裁についてだけ言えることではない。本文についても、また同様であり、寛永九年版の影響を、以後の諸版の上に認めることができる。その典型を二例だけ指摘してみる。

その一。巻頭、老僧と「せんだびつおひたる男」との出合いの描写があり、文章が切れることなく「たうそう」の尊ばれる由縁についての質疑がある。それは、底本を寛永九年版にして記すならば、次のように始まっている。

さてもしよしゆつけの御中にたうそうと申て＊たつとみ候は……

この行文中、＊印を置いた箇所に、寛永無刊記大本では、「ことに」の三文字が入る。また、古活字版の諸本においても、同様に「ことに」の措辞がある。しかし、以後の諸版は、全てこの三字を落し、寛永九年版の行文に従っている。この箇所に限らず、寛永九年版とそれ以前の版との文章の相違は、いずれも小異に止まるものの、なお数箇所を指摘できるが、いずれの場合も、この「ことに」の場合と同断であって、寛永九年版の、以後の諸版に及ぼした影響を証する実例の一とすることができる。因みに、寛永無刊記本と寛永九年版との相違を挙げれば、次のごとくである。

163頁5行目	たうそうと申て・たつとみ候は	ことに
168　14	このほかに・二宗あり。	（ナシ）
169　3	うけたまはり・候なり。	て

171頁18行目　うつたまは、かれがあつめて　を
173　11　一たいは、みやうひぢぞうとし、　申
175　3　西てんぢくに一かこくあり。　南
177　2　一人は帰りけり。　る
　　6　ゆかをつくりてのほりけり。　る
178　5　一はきいのくにの日前のみや
179　4　さるぼとに、のふ一ばんに　は
179　7　ぢごくのおそろしきすこしたりて　さ
　　17　又毎年ならのたき木ののふは　南都
180　9　ほ・けきやうに見えたり。三しうと　つ
　　12　いふはいといとけなき時は、　（ナシ）
　　12　をんなにて候へとも　（ナシ）
181　14　うちわをたくみて候・。　也
183　16　しやかほとけ・、りやうぜんに　の
185　3　くまのこんげんの御つけにより　（ナシ）
186　6　しんだんのさいりんがつくりけり　た
187　15　くうしんばう二人ながら、ちや屋をいで　（ナシ）

ページ・行数を本誌のそれをもって示した。下段が寛永無刊記大本であって、・点が相違箇所である。ただし、漢

字、仮名の表記の違い、あるいは仮名遣いの違いは、とりあげていない。

寛永九年版の影響を証する実例の第二は、次のごときもの。第一〇番の問答は、神前に鳥居の立ついわれが問題にされるが、その問答は、次のごとく始まる。

男問いはく神の前に鳥井のたつはいかなる
ゆへ候や老僧答いはく鳥井二ばしらは生死
をはなるゝことかたきゆへ……

右の翻字は、底本の字配りに従い、改行ももとのとおりにしてみた。「鳥井」の語が隣り合って並ぶところに注目せられたい。寛永九年版は、後続の諸版に、覆刻あるいは求版というかたちで利用されて正保三年版にまで及ぶ。もちろん「鳥井」が隣り合せに並ぶこの箇所も、そのままである。そして明暦二年版において、版式が改まり、それまでの各半丁一〇行全四二・五丁本が、各半丁一一行全三〇丁本に変わる。新版において、右の引用に相当する部分は、次のようにある。

男問いはく神の前に鳥井＊二はしらは生死をはなるゝことかたきゆへ……

明暦二年版の第一〇問答にあっては、男の質問だけが終りまで続き、老僧の答えが、ついに聞けないことになってしまっている。そのような奇態の生ずるのは、ほど遠からぬ箇所に用いられる「鳥井」の文字二つに目がくらみ、＊印の箇所でその問ちょうど一行分を脱落させてしまったことに基づくものであり、この目移りは、寛永九年版以来の「鳥井」の文字が、隣り合って二つ並んでいることに起因するもの、と容易に察することができる。この脱文は、次の明暦三年版にもそのまま持ち込まれ、以後、恣意による加筆によって本文を気ままに訂す幕末に近い二、三種の版の登場まで、このままに放置され、踏襲される。

版本系『ちんてき問答』の場合、おそらくその成立は、古活字版の時代をそれほど溯らないであろう。その意味からしても、古活字版を無視することはできないのではあるが、世上への流布、後代への影響という観点からするとき、古活字版は整版本に比すべくもない。翻刻の底本として、あえて整版を採った理由がここにあり、寛永無刊記大本ではなく、寛永九年の中本を選んだ由縁も、また同じである。

寛永九年版の書誌

装訂　中本一冊。二〇・五×一四・三センチ。

表紙　栗皮無地。原装か。

題簽　欠。表紙左肩に直接「神代之山来」と墨書。

内題　「ちんてき問答」

版心　「ちんてき　（丁付）」

匡郭　なし。字高は、初丁本文第一行で一六・四センチ。

丁数　四三丁。ただし終丁ウは印刷なし。その後に、さらに一丁を加えて書肆名を刷り、見返しに代用する。追加の一丁は丁付を持たない。

丁付　「一（……四十三終）」

本文　各半丁一〇行。句読点なし。濁点あり。漢字に振り仮名多し。各話改行して「一」の文字を冒頭に置く。和歌は二字下げ二行書き。

刊記　終丁オに、本文が三行あり、さらに二行分余白を置いた後に「此ちんてき問答はせけんにおゝく候へ／とも事之外あやまり御座候故今又／あらためて令開板者也」とあり、改行して「寛永九年三月中旬」とする。また、終丁のあとに、さらに一丁を加え、そのオ中央に「京四条坊門通／敦賀屋久兵衛」と刷る。書肆名を記す丁に丁付はない。

印記　なし。

所蔵　五季文庫

五季文庫蔵本は、他の寛永九年版と、いささか趣きを異にしている。たとえば岩瀬文庫蔵本（三六―ロ六〇）を例にとって、相違点を箇条書きにしてみれば、次のごとくである。

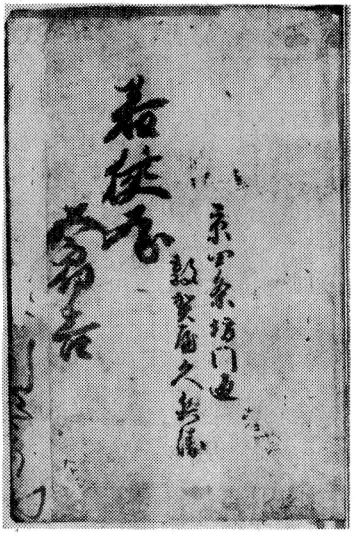
㈠表紙―黒色の表皮に、ごく薄い芯紙を裏打ちし、沙綾形の小紋を空押しする。この一本は、保存の状態が必ずしも良くないが、それゆえに綴糸を替えた以外は、原態をそのまま残していると思われる。原表紙であろう。題簽は残っていない。

㈡丁数―全四二・五丁。本文終丁（第四十三丁）は半丁のみであり、うしろ表紙に貼付される。五季本の第四十三丁が裏面（墨付なし）もあり、さらに書肆名を刷った一丁を添えているのに比べ、一・五丁分の違いがある。

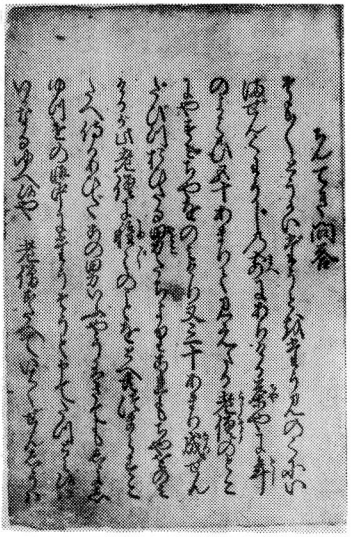
㈢墨色―印刷面への墨（インク）の付き具合いに、差がある。五季本が濃い。

㈣書肆名―敦賀屋久兵衛の記載がない。

以上の四点が違いであって、他には、たとえば印刷面にうかがわれる字形あるいは彫り等に相違を見出すことは困難なもののようである。



巻末の敦賀屋刊記。「若狭屋五郎吉」は後人の墨記。



五季文庫蔵本巻頭

相違点のうち、㈡丁数の意味するところに、いささか注目してみる必要があろう。これは単に紙数の多少だけではない。書肆名の有無がかかわる。岩瀬本の終丁が半丁であって、うしろ見返しの代用として、表紙に張り付けられていることは、この一冊が原態を存していると考えられるところから、この一本に、敦賀屋の名を刷った一丁が、はじめから添えられていなかったことを、推測させる。つまり、寛永九年版には、書肆名を添える版と添えない版との二種があったことになるが、問題は、どちらが初印か、であろう。

初印・後印は、印刷面を熟視することによって判断を付けることができる。ただし、いま採りあげている二種の場合、相違点の㈢墨色の濃淡が障害になる。五季本の方がインクが濃いのであるが、濃いだけでなく、余分に使われていて、全体に文字が太目に刷り上っている。太目に刷られることによって、版面の疲労（かすれや欠損）がカバーされている疑いもあって、岩瀬本との比較を妨げる。五季本は墨色濃厚で、刷りも

鮮やかではあるものの、寛永版が持つはずの雅致において、いささか物足りない。それが刷り工の未熟な技術に原因するものか、板木の疲れを糊塗せんがための技巧に発するものかを、判断できない。

また、初印・後印の判断に、書肆名の有無が決め手になることがあるが、この期の刊行物については、この方法は、あまり有効でない。なぜならば、一般的には、無刊記本の方を後印とみなして、ほぼ問題ないのであるが「寛永ごろの整版本の特徴としては、初刷のときに無刊記のものが多く、中には後印のときに初めて刊記が加えられたという例が多い」（長沢規矩也氏『古書のはなし』124ページ）から、である。

また、この本の場合、初印・後印の判定を下す手がかりが、もう一つある。それは、一丁追加して書肆名を刷る特異な形式である。これは当期の敦賀屋久兵衛版独特のもの。ただし、この追加の丁の存するものを初印とする説（奥野彦六氏『江戸時代の古版本』240ページに紹介された横山重氏の説）、求版本とする説（伊藤正義氏「謡抄考（中）」「文学」昭52・12）、売り分としての売本を意味するという説（朝倉治彦氏『未刊仮名草子集と研究(二)』237ページ）等々、諸説紛々。敦賀屋のこの印は、他にも、住所を「四条坊門通」「四条坊門御幸町西へ入」とするものがある（伊藤氏前記論考）ほか、五季文庫『棠陰比事物語』には「洛陽四条坊門」とし、都合四種があることになる。それぞれに現存する伝本が少なくないから、作品を替えて別版を材料に有刊記・無刊記の比較検討を行ってみるとき、判断が付くかもしれない。その準備のないまま、いま仮に、刷りの鮮明であることをもって、五季文庫本を、翻刻の底本に選んだ。

諸版について

はじめに版本『ぢんてき問答』の諸版を刊行の順序によって並べ、一覧してみる。刊年不明版については、推測に

もとづくか、関連の考えられる版の近くに置くことにした。次に、それぞれの版に与えた一連番号に従って、書誌解題を加える。なお古活字版については、すでに川瀬一馬氏『増補古活字版の研究』に詳しいので、それに譲り、整版についてのみ触れることにしたい。

以下の解題からするだけでも、ここに指摘した以外の版の存在が考えられる。たとえば、丁付に不自然さが残り、元版の存在なくしては解決がつかないものの、その存在が管見に入らなかった場合など、それであるが、その他にも見落しが少なくないであろう。そもそも『ぢんてき問答』の版本は、歴々の文庫図書館に大切に保存される種類のものではなかったようである。そのことは、宗教・教育・文学と、図書館によって分類がまちまちであるところからもうかがわれる。むしろ坊間からの出現が予想され、期待される。調査の不行きとどきをおわびするとともに、今後の増補訂正を庶幾する次第である。

1古活字版

A慶長中刊	11行（途中から10行）		
B慶長元和中刊	11行	39丁	（第一種）
C元和寛永中刊	11行	39丁	（第二種）
D元和寛永中刊	11行	39丁	（第三種）
E元和寛永中刊	12行	35丁	
F元和寛永中刊	11行	39丁	（第四種）
G寛永中刊	11行	36丁	（第五種）

2 寛永中刊大本　12行　35・5丁

3 寛永　九年版　10行　42・5丁　刊記「寛永九年三月中旬」

4 寛永一〇年版

5 寛永一六年版

6 寛永中刊中本　10行　42・5丁

7 正保　二年版　10行　42・5丁　刊記「正保二年」

8 正保　三年版　10行　42・5丁　刊記「正保三年九月吉日」

9 明暦　二年版　11行　30丁　刊記「明暦二年丙申三月中旬　松会市郎兵衛」

10 明暦　三年版　11行　30丁　刊記「明暦三年丁酉三月中旬　あふみや次郎右衛門板」

11 寛文　四年版　14行　26丁　刊記「寛文四甲辰年五月吉日　山本九兵衛板」絵入り

12 寛文　九年版

13 寛文一〇年版　14行　23・5丁　刊記「寛文拾庚戌年菊月中旬　高橋清兵衛板」

14 寛文中刊

15 宝暦　七年版

16 無刊年鱗形屋版　15行　17丁　刊記「うろこかたや孫兵衛開板」絵入り

17 無刊年村田屋版　15行　16丁　刊記「村田屋」絵入り

18 文政一三年版　15行　18・5丁　刊記「干時文政十三歳宿庚寅季秋再刻／馬喰町弐丁目／東都書肆　錦森堂　森屋治兵衛上梓」小本、絵入り

19無刊記泉市版　13行　15・5丁　刊記「東都書肆　芝神明前三嶋町　和泉屋市兵衛版」小本、絵入り
20無刊記文昌堂版　11行　28丁　外題内題とも「絵本塵摘問答」　見返しに「文昌堂梓」小本、絵入り

＊

2寛永無刊記本（静嘉堂文庫　五一一—九　二二〇五五）

〔装訂〕大本一冊。二七・八×一八・四センチ。〔表紙〕墨色無地。原表紙から表皮だけを取って、新しく裏打ちをした改装。〔題簽〕「ちんてき問答」（後題簽）〔内題〕「ちんてき問答」〔版心〕「ちんてき　（丁付）」〔匡郭〕なし。字高、二一・二センチ（上1オ本文一行目、以下同じ）〔丁数〕三六丁（うち終丁オは本文三行。同ウは墨付なし）〔丁付〕「一（……三十六）」〔本文〕各半丁一二行。句点、濁点あり。一部振り仮名もあり。各話ごと改行して、冒頭に「一」の字を置く（以下「一つ書き」と略称する）。和歌は一字下げ、二行に分ち書き。〔刊記〕なし。〔印記〕「松井氏・蔵書章」（朱長方単郭）「静嘉堂蔵書」（朱長方双郭）いずれも巻首（印文中の中黒は改行箇所）。

〔備考〕古活字版七種すべて大本であるが、整版ではこの一種のみ。無刊記ではあるが、寛永九年版より古いとの感を拒めない。同版が天理図書館にある（九一三・六一—イ一三五）。

3寛永九年版

省略。

4寛永一〇年版

奥野彦六氏『江戸時代の古版本　増訂版』317ページに

高橋版、帖入、昭48・4・16白州堂速報

とあるもの。寛「文」十年高橋清兵衛版の誤りか。

5 寛永一六年版

同書321ページに

和紙半截　昭45・3思文閣古書64号

とあるが未見。

6 寛永無刊記中本（京大附属図書館谷村文庫　一―二〇―チ一二）

〔装訂〕中本一冊。一九・七×一四・二センチ。〔表紙〕香色無地。のち表紙。〔題簽〕「塵滴問答」（後題簽）〔内題〕「ちんてき問答」〔版心〕「ちんてき(丁付)」〔匡郭〕なし。字高は一六・七センチ。〔丁数〕四三丁。終丁ウは墨付なく、うしろ表紙に貼付。〔丁付〕「一（……四十二）」終丁に丁付なし。〔本文〕各半丁一〇行。寛永九年版系の覆刻。ただし濁点は少ない。〔刊記〕なし。〔印記〕「京都帝国大学図書」（朱長方単郭）前見返し、「秋邨遺志」（朱長方単郭）内題下。

〔備考〕寛永九年版覆刻本の系統に入るものではあるが、管見に入ったどの版にも相当しない。正保二年版に近似するが、細部において一致しない。最も大きな違いは、刊記を欠く点である。刊記だけではなく、「此ちんてき問答は、せけんにおゝく……」の刊語をも欠く。正保二年版が刊記に入木の跡をとどめる求版本であることは、次項に述べるが、その原版が覆刻の底本にした版に相当するものか。正保二年版より古いとする理由は、印刷紙面に寛永期の

風格を存するところから。あるいは寛永十六年版の刊語以下を削ったものであろうか。同版が天理図書館にもある（九一三・六—イ一三三）。

7正保二年版（静嘉堂文庫　五一一—九　二一〇四四）

〔装訂〕中本一冊。一九・九×一四・三センチ。〔表紙〕墨色無地。原表紙。ただし、うしろ表紙欠。現在は前後一枚、墨色無地の保護表紙が加えられている。〔題簽〕欠。〔内題〕「ちんてき問答」〔版心〕「ちんてき（丁付）」〔匡郭〕なし。字高は一六・八センチ。〔丁数〕四三丁。終丁ウは墨付なし。〔丁付〕「一（……四十三終）」〔本文〕各半丁一〇行。寛永九年版の覆刻。ただし濁点は少ない。〔刊記〕終丁オに「正保二年」とのみ、ただし「正保二」の三字は入木。〔印記〕「田村・□□郎・蔵書」（朱方単郭）「松井氏・蔵書章」（朱長方単郭）「静嘉堂蔵書」（朱長方双郭）いずれも巻首。

〔備考〕この版は寛永九年版の覆刻。そして刊記のうち「正保二」の部分が入木であることは、その間に、少なくとも一版あったことを証する。

8正保三年版（五季文庫）

〔装訂〕中本一冊。一九・五×一三・八センチ。〔表紙〕表皮剝落しているが、栗皮色だったものと思われる。〔題簽〕欠。〔内題〕「ちんてき問答」〔版心〕「ちんてき（丁付）」〔匡郭〕なし。字高は一五・七センチ。〔丁数〕四二・五丁。終丁（半丁）を、うしろ表紙に貼付。〔丁付〕「一（……四十三終）」〔本文〕各半丁一〇行。寛永九年版の覆刻。〔刊記〕終丁オに「正保三年九月吉日」とあるが、「正保三」の三字は入木か。〔印

記〕なし。

〔備考〕寛永九年版の覆刻。ただし正保二年版とは板木を異にする。また、初丁オ10行目から11行目にかけ、

……たうそうと申てたつとみ候□／いかなるゆへ候や……

とあり、古活字版を含め、これ以前の版に□の箇所に「は」とあるのを佚する。行末であるところから、彫り忘れられたものか。この一字欠落は、寛文十年版に至るまで踏襲される。京大国文研究室本（Wq1）は同版であるが、終丁ウに「古本新本／経類品々／売買仕候／京寺町通御池下ル町／芳野屋徳兵衛」とある。これは追刻であろう。

以上の各版、大本の無刊記版を除き、いずれも十行四十二・五丁無郭であることで共通するが、それだけではない。実は寛永九年版の求版あるいは覆刻であり、ほんのわずかな彫り違えをのぞいて、版式を襲ってここに至ったものである。その間十五年で、これだけの重版のあったことは、この作品が読者の好評を受けたものであったことを証している。ただし、発刊書肆名の明記を欠くので、版元が一軒であったか複数であったか不明であるが、正保二年版、同三年版など平行して売弘められていたものであろう。本屋仲間の規制の緩やかなままに、読者の需めに応じて重刊、求版が盛んであったものか。次の明暦二年版に至って、版式が改まる。

9 明暦二年版（都立中央図書館　和―二九九）

〔装訂〕中本一冊。一九・一×一三・五センチ。〔表紙〕白茶地に縹色古代雲を刷り、うしろ表紙に「博文館印」と空押。のち表紙。〔題簽〕欠。表紙左肩に「ちんてき問答」と墨書。〔内題〕「ちんてき問答」〔版心〕「ちんてき　（丁付）」〔匡郭〕単辺。一七・八×一二・四センチ。版心に界線を設けない。横寸法は中央折り目から

の数値。〔丁数〕三〇丁。〔丁付〕「一（……六、七ノ八、九……十一、十二之三、十四……十八、一九廿、廿一……廿三、廿四五、廿六……卅二、卅三四、卅五終）」〔本文〕各半丁一一行。句読点なし。各話改行一つ書き。和歌は一字下げ一行書き。版心をほぼ本文一行分に広くとる。〔刊記〕終丁ウに「明暦二年丙申三月中旬　松会市郎兵衛」〔印記〕なし。

〔備考〕「雲泉荘山誌　別冊第四　家蔵松会板之書目」（昭9、杉浦丘園氏）によると、刊年を欠いて「松会開板」とのみする版があったとのことであるが未見。この版との関係をつまびらかにしない。

10明暦三年版（国会図書館　一四九—三八）

〔装訂〕中本一冊。二一・八×一四・三センチ。〔表紙〕白地に銀色がかった縹色で菊花と目結垣を刷る。のち表紙。現在はその上に保護表紙をかける。〔題簽〕表紙左肩に後題簽を貼り「ちんてき問答　完」と墨書。〔内題〕「ちんてき問答」〔版心〕「ちんてき　（丁付）」〔匡郭〕単辺。一七・五×一二・一センチ。版心に界線を設けない。横寸法は中央折り目からの数値。〔丁数〕三〇丁。〔丁付〕「一（……六、七ノ八、九……十一、十二之三、十四……十八、十九廿、廿一……廿三、廿四五、廿六……卅二、卅三四、卅五終）」〔本文〕各半丁一一行。明暦二年版の覆刻。〔刊記〕終丁ウに「明暦三年丁酉三月中旬　あふみや次郎右衛門板」〔印記〕なし。

〔備考〕明暦二年版の覆刻。雑然とした丁付までをもそのまま覆刻している。明暦二年、同三年と年次が接しているが、求版ではなく、板木を改めての覆刻である。この本（明暦三年版国会蔵本）は、他の中本に比べて寸法がやや大きく、刷りは鮮明である。また、文字のまわりに、斑点状の刷りよごれが目立つが、あるいは校正刷りであったものか。近江屋次郎右衛門は大坂、松会は言うまでもなく江戸、そのような場合には、このような形での重刊が可能であ

ったのであろうか。

11寛文四年版（狩野文庫　狩一―七二三）

〔装訂〕中本一冊。二二・三×一五・二センチ。〔表紙〕縹色無地。原表紙。〔題簽〕「新板絵入塵摘問答（ちんてきもんだう）　全」双辺一五・八×三・二センチ。外題を漢字で記し（「塵」の字に草冠を付けるが、植字の便を考えて通行の文字に変えた）、読み仮名をつけるとともに、左傍に「万物のはじまり」と小書きする。原題簽。〔内題〕「ぢんてき問答」「ち」に濁点がある。〔版心〕「ちんてき　（丁付）」上下に魚尾と黒口あり。〔匡郭〕双辺。一六・六×一二・〇センチ。〔丁数〕二六丁。〔丁付〕「一（……八、九ノ十、十一……廿七）」〔本文〕各半丁一四行。各話改行して冒頭に▲印をつける。和歌も同じ。句読点は黒丸。〔挿画〕1ウ、2オ～8オ、13オ～25オ（以上各丁オのみ）、25ウ、26オ、26ウ。第一図のみ半丁全面。他は頭書欄に相当する上部を野で囲み、二図を並べる。各図「日本のはしまり」「ひゑい山はしまり」などと画中に短い説明を枠で囲んで入れる。〔刊記〕終丁ウに「寛文四甲辰年五月吉日山本九兵衛板」〔印記〕「荒井泰治氏ノ寄附金・ヲ以テ購入セル文学・博士狩野亨吉氏旧蔵書」（朱長方単郭）巻首。

〔備考〕この版に至って『ぢんてき問答』ははじめて挿絵を入れることになる。「九ノ十」丁から「十二」までの三丁は、板木を改めたかと思われ、行数は同じく十四行ながら、一行の字詰めが多く、他の丁と印象を異にする。またこの三丁に挿絵がない。この版は現存する点数が多いが、管見に入ったもの、すべてかくのごとくであった。この版は長く刷り続けられたらしく、東京誌料本（〇〇一四―四）は、うしろ表紙に「手島先生教訓書目次　吉野屋仁兵衛蔵板」なる刷り物を貼付して見返しとする。手島堵庵とその門流の著述刊行目録であるが、そのうちに脇坂義堂『長命になる伝授』（文化一四年刊）が含まれている。吉野屋による求版本であろうが、もってその長寿のほどをうかがう

ことができる。

12 寛文九年版

国書総目録に、岩瀬文庫蔵とするが、同文庫冊子目録の誤植に基づく誤り。同文庫目録カードに寛「永」九年とある。

13 寛文一〇年版（岩瀬文庫　二六―二四）

〔装訂〕中本一冊。一九・〇×一三・二センチ。〔表紙〕万字つなぎと菊花を藍色で刷り、その上から胡粉をかける。のち表紙。〔題簽〕香色地に金箔を散らした紙を表紙左肩に貼るが、文字はない。〔内題〕「ぢんてき問答」〔版心〕「ちんてき　（丁付）」〔匡郭〕単辺。一五・八×一一・九センチ。〔丁数〕二三・五丁。〔丁付〕「（一……二十四）」〔本文〕各半丁一四行。各話はじめに四周を枠で囲った通し番号を付ける。和歌に▲を付ける。〔挿絵〕なし。〔刊記〕終丁オに「寛文拾庚戌年菊月中旬　高橋清兵衛開板」〔印記〕「谷・山」「門・子」（げた印、各朱方白文）「福田文庫」（朱長方双郭）「岩瀬文庫」（朱長方単郭楷書）印文未詳二顆、いずれも巻首。福田文庫印は巻末にも。

〔備考〕寛文四年版以後『ぢんてき問答』には挿絵が付くことになるが、この版にはない。

14 寛文年間版

国書総目録に穂久邇文庫蔵本を挙げるが未見。

15 宝暦七年版

国書総目録に名大蔵とあるが、現在は所在不明とのことで未見。刊年不明鱗形屋版の元版かと思われる。

16 刊年不明鱗形屋版（五季文庫）

〔装訂〕中本一冊。一八・九×一三・六センチ。〔表紙〕栗皮無地。のち表紙。〔題簽〕欠。〔内題〕「ぢんてき問答」〔版心〕上下に黒口があり「てき　（丁付）」〔匡郭〕単辺。一六・五×一二・一センチ。〔丁数〕一七丁。〔丁付〕「一（……十七）」〔本文〕各半丁一五行。句読点なし。各話改行せず、冒頭に▲を付けて追込む。和歌も改行せず、合点を付けての追込み。てにをはに類する辞句の相違が少なくない。〔挿絵〕全一六図。初丁をのぞき、各丁オの下三分の一を用いて各一図を入れる。挿絵には、人物名を枠つきで記入するほか、短い説明文が入り、ときとして「その神のうかりしこともわすられてあなうれしさは身にもあまり」（第二図）のごとく、和歌を添えることもある。〔刊記〕終丁ウに「うろこかたや孫兵衛開板」

〔備考〕この版は、刊記を鱗形屋のまま、西村屋に板木が移ったらしい。すなわち題簽に「絵入ぢんてき問答」とし外題の下に、山形に三つ巴の紋を付け「西村」とする一本がある（不如意文庫、縹色無地の原表紙）。これは西村屋与八の商標。鱗形屋の没落後、西村屋が引き継いで刊行したものか。そうすると安永年間を挟んで刷り続けられていたことになる。印刷面も痛みが激しい。言うまでもなかろうが、二代目与八は鱗形屋孫兵衛の実子。

17 刊年不明村田屋版（五季文庫）

〔装訂〕中本一冊。一八・〇×一四・九センチ。〔表紙〕白茶色無地。近年の改装。〔題簽〕欠。〔内題〕

「ちんてき問答」　〔版心〕上下黒口「てき　（丁付）」〔匡郭〕単辺。一六・五×一二・一センチ。〔丁数〕一六丁。〔丁付〕「一（……六、七八、九……一七）」〔本文〕各半丁一五行。刊年不明鱗形屋版の覆刻。〔挿絵〕全一五図。鱗形屋版の模刻。ただし一図少ない。〔刊記〕終丁ウ左下すみに小さく「村田屋」

〔備考〕鱗形屋版の覆刻であるが、一丁少ない。丁付が「七八」となっている丁の箇所がそれであり、元版の左義長の図を含む丁が省かれる。これは落丁ではなく、丁の変り目では、本文は続く。ただし続いているとはいえ、一丁分に相当する本文が、やはり省かれる。つまり、本文にあっては、省略を弥縫するための細工が施されているのである。その結果「23自在のはじめ」から「26六地蔵のこと」までが抜ける。刊記にある村田屋は、村治こと村田屋治兵衛であろうか。村治は文化末年に出版活動を停止している（中山尚夫氏『堀之内詣・雑司谷紀行』解説249ページ）から、それ以前の刊行であろうが、詳細は不明。なおこの版は、後に鶴屋に板木が譲られたらしい。狩野文庫蔵の『鶴屋本黒本集』（狩4—44）に収められるが、印刷面の疲労が甚しい。

『ぢんてき問答』の版本は、古活字版や寛永無刊記本では大本であったが、寛永九年版以後中本になって久しく続き、江戸後期に至って、さらに小型化する。

18文政一三年版（小野麦水文庫）

〔装訂〕小本一冊。一七・六×一二・〇センチ。〔表紙〕紺色無地。原表紙。〔題簽〕「ぢんてき問答全」とあり、その下に「板元八森」と横一行に書く。それらを双郭で囲み、そのまわりを宝尽しの模様で囲って、さらに単辺の匡郭がある。一三・五×四・七センチ。〔内題〕「万物（はんもつ）のはしめ」〔版心〕「ちん　（丁付）」〔匡郭〕単

辺。一六・〇×一一・三センチ。〔丁数〕一八・五丁。終丁半丁をうしろ表紙に貼付。〔丁付〕「一（……十八、切分）」別に表見返しに、茶屋の景を描き「万物みなその起立ありといへどよく知る人稀なり因て此問答をしるして世の童蒙らが疑惑を弁ずるものなり」とする半丁がある。この見返しと終丁（それぞれ半丁）の版心丁付の部分（何と見返しにも版心がある）に「切分」とある。両面を一丁に刷って、切ったことを意味するのであろう。〔本文〕各半丁一五行。句読点なし。各話のはじめに▲を付けて改行。和歌は〇を付けるのみで改行せず。〔挿絵〕初丁オをのぞいた各丁全面の頭書欄に当る箇所に、横長の絵一図ずつ（ただし8オ、15オは二図並べ、11ウ―12オは見開き一図）。見返しには大きく茶屋の景があるが、画中に「二代目重政画」とあり。〔刊記〕終丁（うしろ見返し）に「于時文政十三歳宿庚寅季秋再刻／馬喰町弐丁目／東都書肆　錦森堂　森屋治兵衛上梓」

〔備考〕この版は各話の内容を要約した小見出しを備えている。また他本にない「雪の事」の一話を加えるなど、恣意的でもある。

19刊年不明泉市版（五季文庫）

〔装訂〕小本一冊。一七・七×一一・八センチ。〔表紙〕紺色無地。〔題簽〕「ぢんてき問答」の上下に、それぞれ横一行で「改正画入」「泉市版」とし、左右に「万民信心」「手引案内」として双郭で囲み、そのまわりを略画化した雲の模様で飾って、さらに単郭で囲む。一二・八×五・七センチ。〔内題〕「塵摘問答発端」（巻首題）、「改正補刻塵摘問答」（見返し題）、「塵摘問答終」（尾題）〔版心〕「ちんてき問答　（丁付）」〔匡郭〕単辺。一五・一×一〇・二センチ。〔丁数〕一五・五丁。〔丁付〕「二（三、四ノ七、八……十一、十二ノ廿三、廿四……廿八、廿九ノ卅三、卅四）」うしろ表紙貼付の終丁半丁に丁付なし。〔本文〕各半丁一三行。句読点なし。各話改行して▲を置く。

和歌は三字下げ一行、合点をかける。なお備考参照。〔挿絵〕全五図。2ウ—3オ、9オ、11オ、24ウ—25オ、34オ。ただし半丁全面を使うことなく、大きさ不定。別に、前見返しの上半分にも一図あり。〔刊記〕「芝神明前三嶋町／東都書肆　和泉屋市兵衛版」

〔備考〕前見返しに甘泉堂泉市の口上があり、校合を加え文義を改めた旨の断りがある。これは従前の諸版が巻末に添える「此ちんてき問答はせけんにおゝく候へとも……」と、撥を一にするものであるものの、この版にあっては、必ずしも文飾だけではなく、いささかの恣意が実際に加えられていることの断りでもある。たとえば「震旦国唐土のことなり」に類する割注の挿入、文意の通りにくい箇所の補訂等、数多くはないものの、存在する。後者として、たとえば、明暦二年版が目移りによって誤った、第一〇問答は、

男又云神のまへに鳥居〔を立るゆゑはいかゞ候や〇老僧答て曰鳥居〕の柱は……

と訂されているごとくである（亀甲括弧内がこの版での増訂）。これで文意は通ったが、正保三年版の措辞とは似るべくもない。それらに増して甚しい恣意は、配列を改めている点である。改編の理由は明示されず、またどのような原則に基づいたかも推測しかねる。あるいは重版類版のそしりを免れるための営為か。見返しに銘打った「改正補刻」の断りも、どうやらそのあたりに魂胆があってのことらしい。

20刊年不明文昌堂版（五季文庫）

〔装訂〕小本一冊。一七・五×一二・〇センチ。〔表紙〕香色布目地。〔題簽〕「絵本塵摘問答　全」双郭。一一・八×二・三センチ。〔内題〕「絵本塵摘問答（えほんちんてきもんどう）」（巻首、見返し）〔版心〕上魚尾と丁付のみ。柱題はなし。〔匡郭〕単辺。一五・二×一〇・五センチ。〔丁数〕二八丁。〔丁付〕「一（……廿八）」〔本文〕各半丁一一

行。濁点なし。各話改行して▲を置く。和歌は二字下げ一行、合点をかける。〔挿絵〕全四図。2ウ—3オ、8オ、17ウ—18オ、28オ　各図、半丁または見開き一丁全面を使う。〔刊記〕なし。ただし見返しに「文昌堂梓」とする。〔印記〕「奥野万・冊本願・之蔵書」（朱方単郭）巻首。

〔備考〕文昌堂の屋号不明。あるいは長島恭三郎か。見返しが丁字色染紙であり、紫色の花ぎれを使うところから、明治版と思われる。「絵本塵摘問答」を称する文政三年再版の合巻があるとのことであるが、未見。その改版本と思われる。

（追記）校正の段階で、万治二年版について触れた記事に気づいた（野田寿雄氏『近世初期小説論』232ページ）。絵入りとのこと。管見に入ったかぎりでは、絵入り本の初めは、寛文四年山本九兵衛版であるが、別項に記したように、この版には、先行する版が存在したとしなければ説明のつかない異常な箇所を見出す。その祖本に当るものが、万治二年版であったかと推察される。なお著者に直接おたずねしてみたところ、古書展の会場において見かけたものであって、現在の所在については御存知ない、とのことであった。

翻刻の要領

一、五季文庫蔵寛永九年敦賀屋九兵衛刊の整版を底本に用いた。
一、漢字は、異体字を含め通行の字体に改めた。
一、濁点は、底本に従い、私に加えることをしていない。

一、底本は句読点を施さないので、新たに加えた。

一、底本では、質問と答えとの間に、一字分の余白が置かれているだけであるが、翻刻に当って、この箇所を改行した。

一、各丁、各面の改まる箇所を」（1オ）のごとくにして示した。

一、底本にない目次を、巻頭に置いた。この目次は、文政十三年森屋版が一話ごとに設けた小見出しを参照しながら、新たに作った。

一、見出しに通し番号を付け、それぞれ相当する本文にも、該当の番号を与え、検索の便を計った。通し番号は、すでに寛文十年高橋版の採用するところであり、それに合せるため、「発端」と「結末」とには番号を与えなかった。

目次

発端（渡唐僧のこと）
1 日本はじまりのこと
2 伊奘諾伊奘冉の尊のこと
3 日本国名のこと
4 比叡山のはじめ
5 高野山のはじめ
6 奈良の七大寺のはじめ
7 書写山のはじめ
8 わが国の数のこと
9 人王のはじめ
10 鳥居のはじめ
11 歌連歌のいはれ
12 弓のはじめ
13 碁将棋のはじめ
14 八宗の次第のこと
15 酒のはじめ
16 酒を戒しむるはじめ
17 茶のはじめ
18 京都地所のこと
19 算のはじめ
20 医師のはじめ
21 暦のはじめ
22 五節句のはじめ
23 自在のはじめ
24 地震のこと
25 橋のはじめ
26 六地蔵のこと
27 須弥山のこと
28 人のかたちのこと
29 彼岸のこと
30 天竺のこと
31 六月一日餅のこと
32 盂蘭盆のはじめ
33 升の底のこと
34 よろづのはじめ
35 登り梯のはじめ
36 世界王の数のこと
37 謡のはじまり
38 相撲のはじめ
39 女を戒しむること
40 神楽のはじめ
41 尺八のはじまり
42 団扇のはじめ
43 扇のはじめ
44 釈迦如来のこと
45 阿弥陀仏のこと
46 時の鐘のはじめ
47 仏法のおこり
48 源平の戦ひ
49 傘のはじまり
50 臼杵のはじめ
51 巡礼のはじめ
52 市のはじめ
53 琵琶のはじめ
54 文字のはじめ
55 富士山の由来
56 念仏の由来
結末

ちんてき問答（内題）

そも〳〵、とうかいだうとをたうみのくに、いまぜんくわうじの前にありける茶やに、年のよはひ五十あまりと見えたる老僧の、とこにやすみ、ちやをのみけり。又三十あまり成、せんだびつおひたる男たちより、これもちやをのみけるが、此老僧に種々のことをとへ共、つまらすこたへ侍るあひだ、この男いふやうは、さてもしよしゆつけの御中に、たうそうと申てたつとみ候は、いかなるゆへ候や。

老僧こたへていはく、ぜんしうは」（1オ）しんだん国にて、しよりうしたるしうなれば、たうしうにてもつはらにて候。又日本よりにつたうせられ候も、がくもんのためにて候。とりわきたつとみ候おしへを、こと〳〵くやぶるをもつはらさとりをさたし候あひだ、こゝをもつて用候也。

1一　男問云、我てうは、こんぼん誰人のひらきたまひ候や。

老僧こたへていはく、むかしてんりんじやうわうの代に、天地六しゆしんどうして、りやうじゆ山のうしとらのすみ、みつたら山といふだけかけて、大かいにしづみけり。それより二十」（1ウ）万一千四百余年に、いざなきいさなみ二人の御神出世し給ひて、ぼん天のうなばらより、あまのさかほこにてさがし給ふ時、あはじ嶋ほこのさきにあたつて、あは国かとて、ほこをひきあけゝれば、そのしたゞりこりかたまりて、一つの嶋となる。則みつたら山のかけていりたるが、ほこにあたりたるなり。さて甲子の年わかくにゝ成により、きのへをはじめて、ねを一ばんにおくなり。そのゝち一つのあしはら生たる間、とよあしはら中つ国とも申候なり。」（2オ）

2一　男問いはく、そのいざなぎいさなみ二人の御神は、本地誰人にて候や。

老僧こたへていはく、二人の御神は、ほんぢ大日によらいのけしんにて、男女ふうふにて御座ありしか、我てうをあらはさんために、男女のかたらひをなし給ひ候なり。

3一　男問云、我朝を、じちいきと申は、いかなるゆへ候や。

老僧答いはく、日本はなんしうといひながら、東海とて、たつみにて日のさかひなる間、日輪をかたとりて、じちいきと申なり。たうどをば、ほしをまねひて、しんだんといふなり。又天ちくをは」（2ウ）月をかたとつて、月氏国と申候。

4一　男問いはく、ひゑい山は、誰人のひらき給ひ候や。

老僧答いはく、かの山は、人王五十代の御門くわんむ天わうの御時、ゑんりやく元年に、でんげう大師の、たうどのてんだい山をうつされたり。さるほどに、たには十六にて三千坊の寺なり。一たび参りたる人は、十あく五ぎやくのつみをほろぼしさふらふと申なり。

5一　男問云、高野山は、たれ人のひらき給ひ候や。

老僧答いはく、仁王五十二代の御門さがの天」（3オ）王の御時、こうぼう大師の御ひらき候。山はとそつのないゐんをへうして、四十九ゐん、ひたまつほう万年のようろ、ねんぶつ三まいの所なり。是により、三国ぶさうのれいちと申なり。

6一　男問いはく、ならの七大寺は、たれ人のひらき給ひ候や。

老僧こたへていはく、七箇寺のかいさんは、めん〳〵に候間、くはしく申せはことつくさず候。七大寺は、くわこ七仏のたびところなり。しんだんぶつかくをうつされたり。

7一　男問いはく、はりまのしよしや寺は、たれ人」（3ウ）のひらき給ひ候や。

老僧答いはく、しよしやは、本は、ふだらくせんのほくゑんのみねにてありしか、きとくのことありて、しやうくう上人のひらき給ひて候。生身のくわんをんにておはしまし候なり。

8一　男問いはく、我朝は三十三箇国にてありつるを、いつの代に六十六か国にわられて候そ。

老僧こたへていはく、むかし、たうどよりけん人きたりていふやうは、日本はわづか三十三か国なり。是ほど小国に、いかてか仏法をひろめんやと申て」（4オ）帰りけり。そのゝち人王三十二代の御門よりめい天王の御とき、六十六かこくにわられて候。さるほとに、五幾内五か国は、五てんぢくをへうす。ばんどう八かこくは、たいぞうかいの八ようをへうす。とうかいだう七か国は、天神七代をかたどる。なんかいだう七かこくは、ふだらくの六くわんをんをかたどる。九州は、こんがうかいの九ゑのまんだらをまなべり。中ごくは、大しやうそんをへうす。ほくろくだう七かこくは、くわこ七仏をへうす。是日本なり。」（4ウ）

9一　男問いはく、仏前に二王をたつるは、いかなる故候や。

老僧こたへていはく、二わうと申は、本地大日によらいなり。すがたは、じやきのかたちなり。是はぶつほうをまもりて、あくまをたいぢせんがために、二わうとげんじ、口をあき、くちをふさぎ、あうんのふたつをへうすなり。

10一　男問いはく、神の前に鳥井のたつは、いかなるゆへ候や。

老僧答いはく、鳥井二ばしらは、生死をはなるゝことかたきゆへ、参りには鳥井の内をとをる。下向にはそとをとをる。上下におなし」（5オ）かたをとをらぬものなり。とをればしゝて又生るゝ心なり。りんゑをきらふ心なり。又玉かきとて、くわかいをへうす。ぜんごんの人はざいほうめつして、ぶつくわにいたるなり。ほう十界をへうす。

11一　男問いはく、歌連歌を用候は、これも仏法なるべく候や。

老僧答いはく、それ歌は、字かす三十一字のものなり。これは、二十八しゆくと日月ほしの、三くわうをそへて

よむなり。はしめの五もしは、五ぢの如来なり。つきの十二字は、十二いんゑんなり。次の七字は、過去七仏なり。つきの七字」（5ウ）は、天神七代をかたどる。つくる人は、しやくそんより一千ざい前に出世せられし、こうしといふ人のつくりはしめたるなり。おろそかに心得給ふべからず。歌をよくよめば、仏神もなふじうし、其身も成道すといふこと、うたがひなし。てんしやう太神の御歌にいはく、

心だにまことのみちにかなひなは
いのらすとてもかみやまもらん

ぜんくわうじ如来の御歌に

いそけたゝみのりのふねの出ぬまに」（6オ）
をくれはてなはたれかわたさん

又、いづみしきぶくまのまうでのとき、ほんぐうの御まへにて、にはかに月のさはりありけれは、かなしみて一首よめり、

いにしへの五しやうの雲のはれやらて
月のさはりとなるそかなしき

とよめり。則ごんげんの御返歌にいはく、

もとよりもちりにましはるかみなれは
月のさはりもなにかくるしき

とよみ給ふ。又、こうぼう大師とさのむろつに御座」（6ウ）ありし時、御歌に、

ほつしやうのむろつときゝてわかすめは

うゐのなみかせたゝぬまもなし

とよみ給ふ。また、かはちのけうこうじへ御さんけいのとき、をみなへしを一もともち給へは、ひじり一人行あひて、一句かくはかり、

をみなへし大しの手にもかくるかな

といへり。大師の御つけくに、

あたなたつたの山こゆるとて

とつけ給ふ。みやうゑ上人の御歌に」（7オ）

心よりほかにはのりのふねもなし

しらねはしつむしれはうかみん

かくのごとくのちしき智人も、こと〳〵く歌をゑひし給ふ。一首の歌のうちに、しんこん五字、六字のみやうかう、八万しよしやうげうこもるなり。

12一　男問いはく、弓は、誰人のはじめ給ひ候や。

老僧こたへていはく、てんぢくのてつりんわうの時、こうはんべうをとて、二人の臣下ありしか、大あくの臣下なればたいぢあるべしとて、たくみ給ふとき、にはかに御門の御にはに、ゆじゆつ」（7ウ）したる木一本あり。たけは七尺五寸にして、えたもなし。じんべんぶつりきなれは、七しゆのつるをあらはして、じんづうのかふら矢にていてとりたるなり。さるほとに、矢はたけさたまらす候。弓は七尺五寸のものなり。しんだんには、くわうていの御とき、ひろまり候なり。又日本には、仁王十五代の御かと、じんぐうくわうぐういこくたいぢの御とき、くわの弓よもぎの矢にて、ふぜんの国うさのみやに御とうりうありて、せめふせ給ひてよりこのかた、ひろまりて候な

り。」（8オ）

13一　男問ていはく、ご、しやうぎ、すごろくなんどゝて、ばんのうへのあそひは、いかなる故候や。

老僧答いはく、ごは十かいをへうす。ばんは二尺二寸四方、四きをかたどるなり。九つのもくめは九ようのほしをまねひ、三百六十日は一年の日かすなり。白いし百八十は、白月なり。くろ石百八十は、こく月なり。二人うつ人は、たもん、ぢこくなり。又しやうぎは、たうどのわうゐのかつせんをまねべり。十六ぜん神しんだんこくに仏法をひろめんとせし時、大あく神たちひろめまじとて、御門をせめたる」（8ウ）すがたなり。馬は、つはものゝさしちがへ〳〵たゝかひたる躰なり。しんだん国には、大しやうぎをもつはらとす。わがてうには、小国なるあひだ、小しやうきをわたせり。寺がたにては、さすべからず。又すご六ばんは、ながさ一尺二寸、これは十二月をへうす。よこ七寸二分は、七十二日の土用をへうす。白石十五は上十五日、くろいし十五は下十五日なり。どうはしゆみせん、さいは日月をへうす。これはきび大臣のひろめ給ふ。

14一　男問いはく、八しうのわたる次第は、いづれ〳〵」（9オ）にて候や。

老僧答いはく、一ばんに、ほつさうじうわたる。二はんに、三ろんしうわたる。三はんに、くしや宗わたる。四はんに、りつそうしうわたる。五はんに、しやうじつ宗わたる。六はんに、けごん宗わたる。七ばんに、てんだいしうわたる。八はんに、しんごん宗わたる。これ八宗といふなり。このほかに二宗あり。ぜんしう、じやうどしうこれなり。あはせて十宗とは是をいふなり。

15一　男問いはく、さけといひて、こめをくさらかして、これをすいたのしむは、いかなるゆへ候や。

老僧こ」（9ウ）たへていはく、むかしてんぢくの大てんりんじやうわうの御時、天よりかんろふりくたる。これをゑんめい水となづく。其後てんりんじやうわうの御時、まかしやりぶ人といふ人、さけをつくりはしめたり。そ

のとしは、みつのとのとりのとしなるあひだ、さけといふ字は、さんずいにとりとかくなり。天ぢくのしゆごといふものが、しやかほとけにつたへ申。其後しんだんへわたし、そのゝち日本へわたるなり。これにより、さけのむ人は、りこんちえありとうけたまはり候なり。」（10オ）

16 一（ママ）男問いはく、それほとめてたき物を、なにとてほとけは御いましめ候や。

老僧答いはく、しやくそんの御でしにしやかたびくといふ人、さけをおほくのみ、どろの中にふしけり。仏御らんずれば、むねのあたりに、ひるがおほくくいつひてあり。仏はかなしくおぼしめし、水をかけて御あらひ候へば仏の御かしらをふみたり。其時、仏のたまはく、けふより以後、まつたくわがでしにさけのむべからすとて、五かいのうちに入給ひ、かたくいましめ給ふなり。まことに〳〵さけのみ候人は、きをやぶり、」（10ウ）いさかひをまねき、ことをかき、つみをつくるもとひなり。

17 一 男問いはく、せけんにちやをのみたのしみ候は、いかなるゆへ候や。

老僧答いはく、てんぢくのぎば大臣は、八万四千のくすりをおぼえ、でし一もんに六万二千のくすりをつたへ、二万二千のくすりをおしへずして死たり。そのかなしひのねんりきのくすりとなり、ぎばかだび所に生たり。それにより、かんねつをとゝのへ、五ざう六ふをとゝのへ、ちえかしこく、やまひなく、おほくのむもどくなり。それ」（11オ）ちやは木にもあらず、くさにもあらす。又ちやと云字は、だびのたの字をくだきて、一もんじをのけて、茶とよむなり。ちやのゆのだうぐは、十二いろなり。これもやくしの十二神をへうすなり。

18 一 男問いはく、京の土をふみたるものは成仏すると申は、いかなるゆへ候や。

老僧こたへていはく、京は本はさだまらず候所に、仁王五十代の御かど、くはんむてんわうの御時、でんげうだいし、ゑんりやく十三年十月二日にひらかれて候なり。九でうのけさをまねび、一条より九条まて、地の下」（11

ウ）にほけきやうを九万部しき、九ほんのじやうどをうつして、ひらき給ひたるあひだ、これにより成仏すと申候。三千大せんせかいに、つゆほども仏道にはづれたる所あるまじく候。

19一　男問いはく、さんはたれ人のはしめ給ひ候や。

老僧こたへていはく、むかし天ちくのめいもんこくに、世自在といふみかと、七さいの御としより、左の御ひさに小竹が一本おひいでたり。みかどいろ〳〵きせいし給ふ。しかれども、ぬけす。そのゝちはたちの御とし、正月一日に、長さ二尺八寸の木に、めん〳〵に」（12オ）日文字すはり、田という字一はうにすはりて、庭前へこくうよりふりたり。その時御ひざの竹、八十一にわれてぬけたり。それよりさんをたくみて、ひろまりたり。せじざいわうは、しやくそんより八千七百年前のみかどなり。さるほどに、さんという字は、たけかふりに廿の王とかくなり。二尺八寸を十分にわりて、二寸八分にさためられたり。又日本へわたることは、せんき二年二月八日に、いづのみしまへ、かめがおひて来たり。しかれども、日本の人はしらず。しんらこくよりけん人来り、いつの」（12ウ）みしまへまいり、かめのおひたるさんをとりて、わが朝へひろめて候。うらさんは十二りうなり。まなふ人の御所立と、りうじゆぼさつのりうも有。せいめい、だう万がりうもあり。こうぼうだいしの御さくもあり。その外、人作四りう有なり。また、田ざん、ぜにこめさんは、日本にて、ぎやうぎぼさつのたくみ給ひ候なり。

20一　男問いはく、くすしはたれ人のはじめ給ひ候や。

老僧答いはく、くすしは、てんぢくのぎば大臣、やくしきやうをよみてひらきたり。日本にわたる事は、」（13オ）りうじゆぼさつのひろめ給ひて候。やまひのいろは、四百四びやうなり。百はくすりにてなをる。百はきねんにてなをる。百ははりにてなをる。百はきうにてなをる。今四びやうはごうびやうとて、死にやまひにて候。くすしのししやうは、やくし如来、そしはりうじゆぼさつにて候なり。

21一　男問いはく、こよみは誰人のはしめ給ひ候や。

老僧答いはく、なが〳〵の物がたりにて候へとも、御へんのとひ給ふ間、あら〳〵かたり候はん。それこよみは、しゆみの四州をつくして、月の大小、日そく月そく、」（13ウ）春夏の土用、秋冬の五きののふさく、草木のおへかれ、三千せかいのたいを、こと〳〵くしるしたるものにて候なり。さるほどに、むかし、大ばんごわうと申わうに、御子五人おはします。太郎の王子を、せいたいりうわうと申て、その御子十人あり。きのへ、きのと、ひのへ、ひのと、つちのえ、つちのと、かのえ、かのと、みづのえ、みづのと、これなり。次郎のわうじをば、しやくたいりうわうと申て、御子十二人あり。ね、うし、とら、う、たつ、み、むま、ひつじ、さる、とり、いぬ、い、これなり。三郎は、びやくたいりうわうと申て、御子十」（14オ）二人あり。たづ、のぞく、みつ、たいら、さだむ、とる、やぶる、あやぶむ、なる、おさむ、ひらく、とづ、これなり。四郎は、こくたいりうわうと申て、御子九人あり。一とく、二ぎ、三じやう、四ぜつ、五き、六がい、七やう、八なん、九やく、これなり。五郎は、わうたいりうわうとて、御子四十八人あり。めん〳〵に申せば、いとまあらず。このわうしたちは、四きのどようをとりあはせ、七十二日づゝおりあはせ給ふなり。さる程に、てんぢくしんだんわかてうにも、れきをもつてこくどをおさめ候なり。

22一　男問いはく、せつくと申て、とりわけいはゝれ候は、」（14ウ）いかなるゆへ候や。

老僧こたへていはく、むかしてんぢく三くわう五ていのとき、大どんわうと申みかどありしが、大あくわうにて、ぶつほうをうちやぶり、まこくになさんとたくみ給ふを、たいぢしたるまねびなり。正月のもちは、かしらをやぶりたるていなり。ゆづりはは、かれかしたなり。むくろじは、みかどよりいたるやなり。はごいたは、よせてのつきたるたてなり。せつぶんのまめは、あく人をうちはらふ心なり。うつたまは、かれがあつめて、ころばした

るすがたなり。なゝくさは、かわをあつめてにたるすかたなり。さきちやうは、御てんへ火」（15オ）をかけ、やきはらひたる心なり。かゆは、ざうをにる心なり。三月三日のくさのもちは、かれがふんなり。もゝは、はかより生たる木なり。五月五日のちまきは、かれがもとゞり、ゐんぢは、みかどへをしよせたるすがた、つくりがたな、よもぎのやは、よせてのだうぐ、しやうぶは、せめころし、ちのたまりたる所に生たるくさなり。七月七日のさうめんは、ざうをくりいだしたる心なり。水をあびるは、ちをすゝぐ義なり。九月九日のあかいひは、かれがしゝむら、さけは、きくすいなどゝつけて、かれがなみだなり。きくのはなは、りやうがんなり。さるほとに、ま」（15ウ）りといふは、かれがくびをけちらかしたるまねひなり。その時八大どうしをけいこにたてゝうちたるあひだ、まりをば八人してけるなり。かゝりのあみは、てんに、こうのあみをはりたるすがたなり。これみな大とんわうをたいししたるまねびなり。ふつほうをたてゝめてたきにより、五せつくとは、このいはれにて候なり。

23一　男問いはく、じさいは、なにをまねびたる物にて候や。

老僧こたへていはく、じざいは、おこりなくたくみたるものなり。仁王二十九代のみかと、せんけ天わうの御とき、たか山といふものがつくりたるなり。大かいに」（16オ）はりをうけて、ほんてんよりいとを一すぢをろして、そのはりのみゝにとをしてひきあげたるをみて、つくりいだしたる物にて候なり。

24一　男問いはく、ちしんとて大ぢのゆるぐは、いかなるゆへ候や。

老僧答いはく、ぢしんのいはれ、先五六年もざしてきゝ給はずは、申つくしがたく候。さりながら、あら〳〵かたり申さん。ぢしんといふは、りうじんどう、火神どう、こんじつてうどう、たいしやくどうと申て、三十四どうかはり〳〵にうごけば、大ぢゆるぎ候。又四しゆ一同にしんどうすれば、てんかはやぶれはつ」（16ウ）へきなり。さる程に、たいしやくどうかゆる時は、てんがふねうなるといへども、ゆらぬにはしかしとて、ていわう、こく

し、しんかの大じにて候。りうじんどうがゆる時は、大水、大かぜにたつなり。火神どうがゆる時は、大日でりにたち候て、五こくにみいらず候。こんじつ鳥どうかゆる時は、大ひやうらんおこつて、ぎやへいるふし候なり。くはしくは、ちどろんに見えたり。

25一　男問いはく、わたりはしは、誰人の所立にて候そや。

老僧こたへていはく、作人なく候。たとへば、しんだんこくをこえ、てんぢくへわたりさふらふくちに、りうさ」（17オ）がはとて、ながさ八千里あり。その川のよこに、三世のしよぶつあつまり給ひて、いしのはしをかけられたり。則いしのはしとかきて、しやつけうとよむなり。又せいしだうとも申。わがてうにては、いせのうぢはしか、さいしよにてさふらふ。いづれもはしは、せいしだうと申也。

26一　男問いはく、六ぢぞうは一ぶつにて候や、又べつ〳〵にて候や。

老僧こたへていはく、六ぢぞうは、ほんぢ一たいにて候へども、しゆじやうさいどのはうべんに、六たうのあるじとなり給ふ。一たいは、みやうひぢそうとし、しやくじやうをもちて、むけんぢごくをすくひ給」（17ウ）ふなり。一たいは、むにぢそうと申て、ほんくはんをもちて、がきたうのくけんをすくひ給ふなり。一たいは、しやりさんぢざうとて、じゆずをもちて、ちくしやうたうのくげんをすくひ給ふなり。一たいは、しやうりうちざうとて、ほこをもちて、しゆらだうのくげんをすくひ給ふなり。一たいは、そくぢざうと申て、衣をもつて、にんだうのくけんをすくひ給ふなり。一たいは、ふくりきちそうと申て、手をあはせて、てんだうのくげんをすくひ給ふなり。かくのごとく六だうはおはしまし候へとも、みな一たいにて候なり。」（18オ）

27一　男問いはく、しゆみせんは八まんゆじゆんと承はりて候が、さやうにて候か。

老僧答いはく、しゆみせんは四方かはるなり。ひかしはしろく、みなみはるり、にしはあかく、きたはきなり。

されは、五しきのうたに、

きたはきにみなみはあをくひがししろ

にしくれなゐにそめいろのやま

28一　男問いはく、人のかたちは、いづくもおなしたぐひにて候や、又べつ〳〵にて候や。

老僧こたへていはく、とうしうは、くにのかたちまろきゆへに、人のおもてもまろきなり。いろはしろし。いのち二百五十年。」（18ウ）なんしうは、くに一方ほそきゆへにより、人のおもても下ぼそにして、いろあをきなり。いのちはふぢやうなり。さいしうは、くにのかたち半月なるゆへにより、人のおもても半月にして、色はあかきなり。いのち五百年なり。ほくしうは、くに四はうなるゆへに、人のおもても四かくにて、色はきなり。いのちは一千年なり。

29一　男問云、ひがんとて御いましめ候は、いかなるゆへ候や。

老僧こたへていはく、天ぢくまかだこくに、きんだうあり。名をば、ぜんぼうだうといふなり。間数（かず）は」（19オ）二千八百二十五けんなり。そのだうへ、二月に七日と八月に七日と、二きに、ゑんま大わうくしやうじんとあつまりて、人げんのあくをしたるものは、ぢごくへおとし、善（ぜん）をしたるものは、こがねのふだにつけ給ふなり。又そのだうの前に、四十里四方のいけあり。名を八くどくちといふ。そのいけに、二月に七日と八月に七日となみたちて、つねはなみたゝず。これにより、ひがんとは、かのきしとかくなり。さるほとに、こがねのふだにつかんために、しゆつけをくやうし、せんをして、心をいましめ候なり。」（19ウ）

30一　男問云、てんぢくは、なにほとなるくににて候や。

老僧こたへていはく、日本よりにしへ三千里わたり、しんだんこくあり。それより一万里にしへわたりて、大山

あり。名をさうけい山といふなり。それをこえて大河あり。りうさ川と名づく。それをわたりて、五天ぢくあり。東てんぢくに一かこくあり。くるこくといふなり。南てんぢくに七かこく、けうさらこく、けいひん国、はだいこく、しやたこく、しやゑこく、びしやりこく、けんだゑこく、これなり。西てんぢくに一かこくあり。はらなひこくこれなり。北てんちくに三がこくあり。そう」（20オ）きたこく、ゑんみこく、けんだこく、つしやごく、これなり。中てんぢくに四かこくあり。まかつだいこく、からけんこく、かいえこく、くしなこく、これなり。十六の大こくといふは、この五てんぢくを申候なり。

31一　男問云、六月一日にもちをくひ候は、いかなるゆへ候や。

老僧こたへていはく、六月一日に、たんばのひむろ山より、みかどへこほりが毎年参りさふらふ。きんりのおほせなれは、なつもこほりがはるぞといふ心なり。このいはれにより、こほりもちとなづけて、いはひさふらふなり。くはしくは、だいりのしんしといふまき物に」（20ウ）見えたり。

32一　男問ていはく、ぼんに死人をとふらひ候は、いかなるゆへ候や。

老僧こたへて云、しやくそんの御はうべんにて、たほうぶつげんじ給ひて、七月十四日に、一百三十六のぢごくのかまのふたをあけられ候間、ぼんにまうしやをとふらひ候。しかれば、ごくそつあはうらせつども、はやぢごくに返し給へとて、さけびけり。ごくそつどもをなぐさめんがために、五百人のらかんたち大ぜいつけられて、たいこかねをこしらへ、をどりをはじめ給ふなり。ごくそつどもこれに見ほるゝそのあひだに、」（21オ）死人をとりてとふらひ給ふなり。ぼんのをどりは、このまねびなり。又せがきは、もくれんそんじやのはしめ給ふ。一たびしゝたるもの、人げんにかへることはなけれとも、仏のあそばされたるぎなれば、かやうにとふらひ候。たとへば、うつとひゞくとの心なり。しう、ししやう、おや、あにの、みやうがのためにて候。くはしくは、うらぼんきやうに

見えたり。

33一　男問云、ますのそこを一まいそこにせぬと申は、いかなるゆへ候や。

老僧こたへていはく、しやかによらいの御にうめつの時、御しやりになり給ふ。五百の御でし」（21ウ）あつまりて、はかりて見んとありし時、かせうのはうべんめぐらし、ますのそこをわりて、もらし取給ひて候。そのゆへに一まひそこをせぬと申候。

34一　男問云、万物のはじめはいづれにて候や。

老僧こたへていはく、てんぢくしんだんのことはしらず候。日本におゐて、国のはじめはやまとのくに、しまのはじめはあはぢしま、こほりのはじめはうだのこほり、いちのはじめは三わのいち、てらのはしめはたちばなてら、ぶつほうのはじめはてんわうじ、山のはしめはひえいざん、ぶしのはしめは大しよくはん、さとのはしめはたつた」（22オ）のさと、かみのはじめはてんせうだいじん、はしのはしめはいせのうぢはし、いくさのはじめはいこくたいじにて候也。

35一　男問云、のぼりはしは誰人の所立にて候や。

老僧答いはく、なが〳〵の物がたりにて候へとも、御へんのとひ給ふあひだ、あら〳〵かたり申さん。仁王十一たいのみかど、すいにんてんわうの御とき、日りん九ついで給ひて候。しかればてんがの大あくなるへしとて、はかせをめされ御とひありければ、相人申やう、これこそわがてうのふつほうわうぼうの、いとくをあらはさんがためと見えて候。たとへば、きたのはづれ」（22ウ）なる日りんは、日にて候。それよりみなみにならびたる八つは、みなからすにて候べし。このからすは、地より八町うへに有べし。くつきやうのいてをもつて、いさせられ候べし。しからずは、天下のもつけになるべしと申ける。さらばとて、みかどよりせんじにて、くつきやうのいて九人

すぐりて、かの日りんをいておとせとのせんしありければ、九つの日りん、一つは本の日にて候あひだ、八人していむとて、一人は帰りけり。さて八人のいては、おもひ〳〵にたくみたり。先一人は、たかさ一丈のたなに、五このはしをさしたり。一人は一丈五尺のゆかに、」（23オ）七つごのはしをさしたり。一人は二丈のゆかに、九つごのはしをさしたり。一人は二丈五尺のたなに、十三ごのはしをさし、ひとりは三丈のたなに、十七ごのはしをさしたり。一人は三丈四尺のたなに、十九このはしをさし、ひとり四丈のたなに、二十五このはしをさし、今一人は十六丈のたなに、七十五このはしをさしたり。かくのことくおもひ〳〵にゆかをつくりてのほりけり。先十六ぢやうのたなにのぼりたるいては、あいぞめまじへのひたゝれに、ふえどうのゆみに大なかぐろの矢をゝひ、四ぢやうのだ（ママ）な、三丈四尺」（23ウ）のたな、三丈四尺（ママ）のたな、三丈のたな、このいては、こむらごうのひたゝれに、ふしどうのゆみに、むらさきかばのみつぼしのゆかけに、こうすへをのそやをおひ、二丈五尺のたな、二丈のたな、一丈五しやくのたな、此四人（ママ）は、はりまこのひたゝれに、しげどうのゆみにきりふのそやおひ、をの〳〵じんりきをおこして、すいにん十八年二月十日たつの時をもつて、かのゆかに上りけり。さるほどに、所はばんどうのむさし野なり。十六丈のたなにのぼりたるいて、とうばうにむかひ、なむ三世のしよぶつ、ねがはくは、わがてうにぶつほうをたつべくは、」（24オ）御ちからをそへて、八つの日りんをいさせてたべと、大なかぐろのそやを取て、からりとうちつがひ、よつひきしめてはなしたり。じんへんぶつりきなれば、などかあたらであるべき。きたのかたより二ばんめの日りんに、したゝかにあたれば、やまとかわちのさかひなる、こんがうせんにおちにけり。きみもだいじんも、以下のきせんの人々までも、めでたきといふことかきりなし。又七人のいてたちも、おもひ〳〵にぐはんをたて、われも〳〵もといたりければ、七つの矢七つの日りんにしたゝかにあたつて、その日、つくしのひうが」（24ウ）のくにゝおちにける。それにより、ひうがとは、日にむかふとかくなり。さる程に、その時は、なんばの京なれば、

みかどもくげもだいじんも、なんばにかへらせ給ひて、ほどなく二月つこもりに、八の日りんをめしのほせられければ、たけ一丈五尺のからすなり。おはゝ一丈六しやくなり。はしは三尺八寸、さてそのからすをこと〳〵く、くびをきらせてみ給へば、二寸四はうのたま、一づゝあり。そのなかに、一寸六分のしやかぶつ一たいづゝあり。これをは八つながらみかとへめされ、一をばおはりのあつたのみやにこめ給ふ。一つはいせの外宮(げくう)」(25オ)にこめられたり。一はきいのくにの日前のみやにこめ給ふ。一はしなのゝくに、すわのやしろにこめ給ふ。一はふぜんのくに、うさ八まんにこめ、ひとつはあふさかの明神にこめ給ふ。ひとつはすみよしの二のじんでんにこめ給ふ。一は御かとの御たからものにおさまりたり。すなはち、このからすは、第六てんのまわうなりしが、こくどをおさめんためのはうべんに、生じたるなり。又八つのからすのしがひを、てんわうじのきたなる、玉つくりといふ所に、ぢの下四ちやうそこに、うづまれたり。京の町にからすま」(25ウ)ると申は、そのつかをかたどるなり。さてかのいて立には、ばんどう八かこくを給はるなり。うらなひたるさう人には、御ひきで物かずをしらす。のぼりはしと申は、この時よりそはしまりたり。さるほどに、はしの子、てうにはせぬなり。はんにするといへり。

36

一　男問云、三千大千せかいに、わうのかず、いかほと御ざ候や。

老僧こたへていはく、三千大せんせかいと申は、五百の中ごくとしんだんとを、中せんかいといへり。一万の小こくとむりやうのそくさんごくと、」(26オ)そのほかわかてうをあはせて、小せんかいと申なり。さてわうかずは、五てんぢくに一万千九百二十わうあり。五百の中国に五千わうあり。一万の小こくに百わうあり。むりやうそくさんこくには、一王もなし。しんだんには七みかどあり。又そくさんごくのほかにて候へども、わがてうには一わうまします。以上あはせて、一万七千廿八王にて候なり。

37

一　男問云、うたひは、誰人のつくり給ひ候や。

老僧こたへていはく、うたひは、にんわう五十だいのみかど、くはんむてんわうの御とき、ひゑいざん」（26ウ）のふもとなるさかもとに、さるが三びきよりあひて、一ひきのさるは、がくにあはせて手をたゝくなり。これすなはち、さんわうごんげんのぢげんなれば、きびの大じんのこれをまねびて、たくみ給ひて候。四座といふは、四てんわうをかたどれり。さるほどに、のふ一ばんに、五じきやうと一ごのすがたなり。したいは、こかのはつねなり。わきは、ほとけ十九にてしゆつけの心なり。又むまれてなをつく心なり。みちゆきは、あらゝせんにいり給ふこゝろ、又わらんべの取たちして、すこしあゆむ心なり。ろ」（27オ）んぎは、ほとけあらゝせんにんにみやづかへ、なん行ぐぎやうをし給ふ心なり。また十さいばかりのとき、ぢごくのおそろしきすこしたりて、人とものをろんずる心なり。小うたひは、ほとけじやうだうありて、さいしよに、けごんきやうをとき給ふすがたなり。また十七八にして、すがたよくおもふことなくして、あそぶ心なり。くせまひは、ほとけ七十三より、しんじつのさうをあらはして、ほけきやうをとき給ふすがたなり。また四十あまりにて、ちゑかしこく、べんぜついたつて、物いふすがたな」（27ウ）り。くりあげは、ほとけわづらはせ給ふ時、八万の大しゆのさけびこゑなり。又おひて二たびわかくなりて、心をなぐさむなり。ものをふくすがたなり。きりは、ほとけねはんの時、三世のしよぶつのなき給ふ心、又おひてわづらひしとき、今一たびほんふくせんとねがへども、しやうじのならひ、むなしくなりて、わびしき心なり。つゞみは、さるの手をうちたるぎなり。太こは、りやうぜんしよはうの時、もろ〳〵のりうわうのまいりたりし、くはんぎのをとなり。ふえは、いだてんのいびきなり。きやう」（28オ）げんは、だいばか、御せつほうをさまたげたるていなり。おきなは、おひたるさるの、さんわうの御まへにてまひけるかたちなり。これにより、じにはさるがくとかくなり。うたひをよくうたへば、仏神もなふじうし、その身もとくだうするなり。又毎年ならのたき木ののふは、くに〳〵しよ〳〵のしんぼくをもおそれず、さるがくのきり、たきたるまつりにて候なり。

38一　男問云、かみのまへのすまふは、いかなるゆへ候や。
老僧こたへていはく、すまふは、りやうぶの大日ふん」（28ウ）しんにて、りやうぶ不二のすがたをみせたる物なり。かみおもしろくおぼしめされ候間、それにより用候。

39一　男問云、人間のうちにて、ことに女を御いましめ候は、いかなるゆへ候や。
老僧こたへていはく、女なればとて、しづむべきにあらず候へとも、五しやう三しうを、ことにいましめられ候。五しやうといふは、一には、ぼんでんわうとなりても、かうたいのくらゐにいたらず、二には、たいしやくとなりても、とそつにまいらず、三には、まわうとなりても、第六てんにほこらず、四には、てんりんじやうわうとなりても、四しう」（29オ）をふまず、五には、ぶつしんとなりても、八さうじやうたうをとなへず、これ五しやうなり。くはしくは、ほけきやうに見えたり。三しうといふは、いといとけなき時はおやにしたがひ、さかんにてはおとこにしたがひ、おひては子にしたがひて、一せのあひだいゑをもたず、一ご人にしたがふ、これ三しうなり。しかりといへども、八さいのりうによも、しやかほとけになげきをかけて、なんばうむくせかいのじやうだうをかうむりて候。をんなにて候へとも、心上のはちすひらけ候はゞ、じやうぶつあるべく候」（29ウ）なり。

40一　男問ていはく、かぐらといふことは、たれ人のはじめ給ひ候や。
老僧こたへていはく、それかぐらは、ぢじん五だいのはじめ、てんしやうだいじん、日月をうばひとり、あまのいはとへひきこもり給ひての時、こくどくらやみになりにけるあひだ、大りきわうといひし人、はうべんをめぐらして、かぐらといふことをたくみて、いはとのまへにてまはせられければ、天しやうだいじん、あらおもしろやとの給ひて、すこしいはとをあけ給ひしかば、又大りきわう、やがて」（30オ）いはとにうち入て、日月さうにつかんていてにける。大りきわうは、その時より、日たきそんのみやうじんといはゝれて、きいのくにの山東といふざい

しよに、あらはれ給ふ。さる程に、みこのまひけるは、三じんゑんまんのすがたなり。ふるすゞのひゝきは、ぢやう夜のねふりをさますなり。五人のかくらおのこは、五ぢのによらいなり。八人のやをとめは、八大ゑのとくをかたどるなり。うつ太こつゞみの音は、しやうじのゆめをさますぎなり。とひやうしのさつ〳〵のこゑは、てんちわがうにして、神をだや」（30ウ）かなるていなり。かぐらは、このときよりぞはじまり候。

41一　男問云、しやく八は、たれ人のはじめ給ひ候や。

老僧こたへていはく、すねんよりありといへとも、尺尊（ママ）より一千年前に、こうしと云人のつくりたるなり。すかたは、しゆみせんなり。五つのあなは、五ぢによらいなり。又はるなつあきふゆのどようなり。ふく時は、わうしき、ばんしき、一こつ、ひやうでう、そうでうの五をんをいだす。つら〳〵くはんじて見れば、こんがうのしやうたい、へう〳〵たり。ふかぬ時は、ふしやう」（31オ）ふめつのすがたなり。もとよりむ一もつの心をあらはせり。めうほうれんげきやうをうつしたるものにて候なり。

42一　男問云、うちわのおこりは、いかなるゆへ候や。

老僧こたへていはく、うちわは、先白月（はくけつ）がたくみて候。すがたは、まん月をうつせり。うごかせば、せい風出して、むしのまうねんをはらす。風のたよりをもつて、ほうかいしやうたいちをしるなり。かのはくげつは、月氏国（げつしこく）のものにて候が、ゆめのつげをもつて、うちわをたくみて候。」（31ウ）

43一　男問云、あふぎは、たれ人のはじめ給ひ候や。

老僧こたへていはく、あふぎは、はんじよがたくみたるなり。すがたは、てんぢくのしゆたつぢ（ママ）やうじやがまどをまねべり。このまどは、すゑひろく、したをつめて、きんのはしらをたてゝ、くもでをしろかねにてとをすなり。そらを五しきのかみにてはりて、しもをあけてかぜをとをす。さるほどに、かせふく時は、すなはちひらく。

ふかぬときは、たつなり。かなめは、しろかねのくさりなり。ひらいてあふげば、よろづのちりをはらひて、かぜにあふなり。たゝみたる時は、」（32オ）むしむじやうのすがた、ぢやう夜のねふりをさまさぬ心なり。手にふるれば、しやうじのゆめをおどろかすなり。だんぜつのあふぎとて、ゆきやこほりとへだつるも、とくればおなじたに河のみづとなりて候。

44一　男問云、しやかによらいのしさいは、いかなる故候や。

らうそうこたへていはく、しやくそんのこんぼんは、てんぢくのじやうぼん大わうに、二人のわうじまします。しつだたいし、なんだたいし、これなり。太郎のしつだたいし、十九さいの御時、わうくうをしのびいで給ひて、あらゝせんにんをたのま」（32ウ）せ給ひて、山にとりこもり、三きのあひだ、あらゝせんにんにみやづかへし、木をこり水をくみ給ひて、三年の後に、ぶつほうをすこしとひ給へば、かのせんにんやゝありていふやうは、とうなんせいぼく四ゆい上下、ぶつほうは心にてしるべきといひけるあひだ、それよりだんどくせんにいり給ひて、なんぎやうく行しゆいにて、そのゝち十二月八日のよ、みやうじやうをみてさとらせ給ひ、三十の御とし、じやうだうならせ給ひて、それより四十九年のあひだ、けごん、あごん、ほうどう、はんにや、ほつ」（33オ）け、五じ一さいきやうをとき給ひて、八十さいにて御にうめつ候なり。

45一　男問云、あみだぶつのぐわんらいは、いかゞ候や。

老僧こたへていはく、あみだによらいは、むかし、とうじやうこくのていわう、はんぞくわうと申に、ぜんじやうたいしと申わうじ、二十一さいの御時、さいじやうこくの御師、しゆくしゝわうと申に、をとめたいしと申御ひめありしが、び人申におよばす候。かのぜんしやうたいし、こひにならせ給ひて、十まんりのかいしやうをわたるとて、王宮をしのびいで」（33ウ）給ひて、いろ〳〵のくるしみにて、三年三月にてうみをわたり、さいじやうこく

へ行給ひ、をとめたいしとさいあひあり候へば、さいじやうこくのたいじんたち、しかるべからすとて、ふうふともに、くもがしまへながしけり。このしまは、とうじやうこくへも五百里、さいじやうこくへも五百里なり。じんりんはなれくにとをし。とやせんかくやせんと、かなしみ給ふはかぎりなし。かくて三十年をすぎ給ふに、御子二人まうけ給ふ。太良は、しやくまにたいしと申、次郎は、ちくばたいしと申けり。あはれわかくにゝかへるなら」（34オ）ば、一さいしゆじやうののぞみをかなへんとぞおほせける。かくて三十年の後、四かい一とうにしんどうして、もろ〳〵のりうわうたち、くもがしまにいりきたつて、四人の人々をいだきとつて、ほどなくさいじやうこくのみやこに、すて申てぞかへりける。しかるあひだ、はんそくわうに、ぜんじやうたいしを、わうくうへくわんぎよならせ給へば、二人の御まごを御覧じて、きゑつのまゆをひらき給ふ。かくて一千年の後に、をとめたいし御にうめつありしかば、ぜんしやうたいしかなしみ給ひて、是」（34ウ）をしゆつりのたねとして、しやうがくをとり給て候。かくてあみだぶつとげんじ給ひて、六十の大ぐわんをたてゝ、このうち十二ぐはんをば、にうめつありしをとめたいしに、ゆづり給ふ。さるほどに、をとめたいしは、やくしによらいとあらはれ給ふ。太良のしやくまにたいしは、くわんをんとなり給ふ。次郎のちくばたいしは、せいしぼさつとあらはれ給ひ候。のこる四十八ぐはんを、みだてうせのひくはんとこうし給ひて候なり。また、いのちなかきほとけなれば、むりやうじゆぶつとも申候なり。」（35オ）

46一　男問云、せけんに、かねをゐてつき候は、いかなるゆへ候や。

老僧こたへていはく、しやかほとけ、りやうぜんにいり給ひし時、しゆだつちやうしやかゐて参らせたるなり。これをりやうぜん四はうにつりてつきしかば、三おくのしゆじやう、こと〳〵く参り、そのほかだいじんも御かども、十万人ないし五万人、一万人、おもひ〳〵に人をつれてぞ、とう山せられける。また、なんたりうわう、ばつ

なんだりうわう、しやかつらりうわう、わしゆきつりうわう、とくしやかりうわう、あなば」（35ウ）だつたりうわう、まなしりうわう、うばつらりうわう、この八大りうわうたちも、けんぞくをひきつれて参りたり。又じんでう、いりあひ、しよや、ご夜には、ねはんきやうの四くのもんを、ひゞき候なり。これをまねんで、寺あるほどの所には、かねをつくりてつき候なり。

47一　男問云、ぶつほうは、にしよりわたりて候を、なにとて、ぶつほうとうぜんとは申候や。

老僧こたへていはく、おほせのごとく、にしよりわたりて候へども、それは中ごろの事、先さいしよには、しやう」（36オ）とくたいししゆつせし給ひて、四十六かじをこんりうして、ぶつほうをひろめ給ひて候。よのしうは、こと〳〵くそれより二百年のちにわたりてあるあひた、こゝをもつて、ぶつほうとうぜんとは申也。

48一　男問云、げんじ、へいけのたゝかひは、いかなる故候や。

老僧こたへていはく、先へいけは、にんわう五十だいのみかど、くわんむてんわうのながれにて、げんじは、にんわう五十六だいのみかど、せいわてんわうのながれにて候。あらそふいしゆは、だいりのしんし、ほうけん、ないしどころ、此三つのたから」（36ウ）物をろんじてのたゝかひなり。しかれば平家（へいけ）は、大じやうのにうだうきよもりのとき、とう大じをやきうしなひたるばつにて、さいかいにしづまれて候なり。

49一　男問ていはく、かさは、たれ人のはじめ給ひ候や。

らうそうこたへていはく、かさは、にんわう四十五たいのみかど、しやうむてんわうの御時、しやうれき三年に、田むらの御うちかさしげといふ人の、たくみたり。それにより、ほねかずさだまらず、たけよこもさだまらず候。又さしかさは、にんわう七だ（ママ）」（37オ）いのみかど、かうれいてんわうの御時、はじまりて候なり。

50一　男問云、うす、きねは、たれ人のはしめ給ひ候や。

老僧こたへていはく、てつりんわうの御時、ゆうふといふものが、たくみいだして候なり。

51一　男問云、三十三所のしゆんれいは、たれ人のはじめ給ひ候や。

老僧こたへていはく、にんわう十四（ママ）だいのみかど、ゑんゆうゐんの御時、ゑいくはん二年二月十七日、しやうぐう上人御とし十七さいにて、くまのゝなちよりはしめ給ひて、六月一日に、みのゝくにたにぐみにて、おさめられ候。たとへば、まよひのぼんぶ」（37ウ）のためにて候。出家は、このみてむやくなり。かのしやうぐう上人と申は、にんわう六十五代の御かど、くわさんのほうわうの御子にて御ざありしが、くまのこんげんの御つけにより、十七さいにて、はせのぶつがん上人と、かはちのとくだう上人と、どうたうなされて、めされ候なり。

52一　男問云、いちは、たれ人の所立にて候や。

老僧こたへていはく、それいちは、しんだんのみやこをまねびたるなり。四方のもんより、みつき物をはこび、其ほか上下のしゆつにう、かずをしらずみち〳〵たり。」（38オ）よるひるふだん、かくのごとくあるなり。日本には、にんわう四十五だいのみかど、しやうむてんわうの御時、てんへいしやうれき七年に、なんとのけんほう僧正の、しんたんのみやこをかたどりて、みわのいちをはじめられてよりこのかた、いちは、ところ〳〵に候。こゝをもつて、くわいぶんつかはねども、めん〳〵の、りのために、いちにいで候なり。

53一　男問云、びわは、たれ人のはじめ給ひ候や。

老僧こたへていはく、それびわは、てんぢくのあしゆりんわうの代の、きふといふものがつくりたるな」（38ウ）り。すがたは大日によらい、ばんぢをかたどるなり。また、てんぢく、しんだん、わがてうをうつすなり。日本にわたることは、にんわう六十たいのみかど、ゑむぎのわうの御とき、ひろまりて候。くはしくは、びわのをんぎに見えたり。

54一　男問ていはく、もんじは、たれ人のはじめ給ひ候や。

老僧こたへていはく、もんじは、ぼんでんわうの、四十八じをくちにとなへて、このしやばせかいに、ひろめ給ふ。又八万四千のもんじは、大しやうもんしゆの所立にて候。又かみは、しんだんのさいりんがつ」（39オ）くりけり。すゞりは、しろといふものがつくり候。すみは、くんきうかつくるなり。ふでは、もうてんかつくるなり。

55一　男問ていはく、ふじの山は、いつの世にいでき候や。

老僧こたへていはく、にんわう二十二代の御かど、ゆうりやくてんわうの御とき、一日一夜にゆじゆつしたり。山たかうして、ふだんくもかすみにかくれて候へば、見つけたる人もなかりしに、にんわう三十一代のみかど、びだつわうの御とき、きんくわう四年に、ゑんのぎやうじやのみつけ給ひて、」（39ウ）すなはちふみそめ給ひてこのかた、ふじ参りは候なり。さるほどに、中くうより下は、こんりんざいより出きたり候。中くうより上は、てんよりふりて候。しかるあひだ、てんちわがうさんと申候。

56一　男問云、ねんぶつは、しよきやうの中のかんもんと申は、いかなるゆへぞや。

老僧こたへていはく、しよきやうの中のかんもんは、ほけきやうにて候。またねんぶつは、みだゑしやう万とくのみやうがうなれば、九ほんのためにひろめ給へば、三しん」（40オ）すなはち一身とこゝろへ候は、一ねんのみたは、こしんにおさまりて候なり。八万ほうざうの中に第一は、めうほうれんげきやうを申なり。

その時、この男手をうち申やう、さても〳〵御僧さまは、いかなる人にて御さ候や。かりそめにまいりあひ、しんぢうのふしんをはらし候。いづくにて御がくもん、御きはめ候や。われらも六十よしうをあら〳〵めくりて候へとも、これほどたつとき御僧にあひ申事は、今はじめとよろこびければ、らうそう申されけるは、ぐそうは、こんぼんさ」（40ウ）ぬきのものにてありつるが、とし十九にてかみをそり、それより心をひきかへて、たま〳〵にんじ

んをえたる時、いかにもして生死をはなれ、じやうだうにいり候はんと存候て、いろ〳〵しゆいし候つれども、ざぜんしてかべにむかひてさとらんこともかたし。またしんちしゆぎやうをして、そくしんそくぶつの本しやうをゑんことも、なをかたし。又だうとうてらをこんりうして、そのくどくをかうふらんもとをし。たま〳〵むりやうをつこうにて、しやくそんだいしの御をしへにあひ」（41オ）奉りたるとき、とやせんかくやせんとおもひ、とし廿一より、かうやさんにのぼり、大らくゐんにて念仏申てありしが、ふしぎにがくもんを心がけ、かやうにまかりなり候。御身はいかなる人ぞとありければ、かのおのこ申やう、われらは、しやうこくやまとのものにて候か、とし十二より、なんとこうぶくじしやかゐんに、ほうこうつかまつり候が、それにても身ををくりがたくて、此十四五年のあひだ、せんだびつをおひて、しよこくをめぐり候。たゞ今おほせのごとく、ひんせんなれば、」（41ウ）ぶつほうそうをもくやうせず、参行（さんぎやう）はもとより、心つたなくておよびなし。人の物は、すこしなりともとめたく、わが物は、すこしもおしくて、心にぜんはなし。じひの心が候はねば、せいてうの一つをも、そうにしんずることもなし。しよせんまれなる生をうけて、おもへば一ごはゆめのあひだなり。ぜんごんの心は、一てきのつゆほども候はず。じやうふつをゑんこと、あかつきのゆめにもあるまじとおもひさだめて候あひだ、御そうさまの御でしになり申さんとて、や」（42オ）がてかみをそりて、すみぞめの衣にすがたをかへてありしとき、らうそう申されけるは、ほうしがなをば、くうしんばうと申候あひだ、御身の名をば、けんしんばうとぞつけ給ふ。さるほどに、けんしんは、せんだびつをば、ちや屋にをきて、中なる物をこきやくして、くうしんばうに参らするほどに、くうしんばう二人ながら、ちや屋をいで、ぜんくわうじへ参らんとて、十ちやうばかりあゆみて、二人ながら、かきけすやうにうせにけり。そのもんどうの時、いせのくにあさま」（42ウ）の大せんばうといひし人、そのちや屋にありあひしが、あまりにふしぎなるもんどうなりとて、やがてかきをき候て、せけんにひろまり候也。

此ちんてき問答は、せけんにおゝく候へとも、事の外あやまり御座候故、今又あらためて令開板者也。

寛永九年三月中旬」（43オ）」（43ウ）

京四条坊門通

敦賀屋久兵衛」（44オ）